

天草版平家物語の動詞について

——連体形の終止形化を中心に——

江口正弘

キーワード：天草版平家・動詞の用法・連体形の終止形化
・二段活用的一段化

要旨

動詞の活用が古代語から近代語となるためには連体形の終止形化と二段活用の一段化の現象があることは、国語史の説くとおりである。この天草版平家は室町末期の口語資料として、右の二現象がどう現れているかは、興味のある問題である。

まず二段活用の一段化については、一段化して用いられている語は「経」一語だけである。また連体形の終止形化の現象は、終止法においては、かつての連体形が終止形としての用法を果たして一つの例外もない。ただ助動詞や助詞に下接する用法では、古い形の終止形についた例も残っていて、その用法では新旧両法の形がみられる。またこの点から連体形の終止形化は、まず終止法から新しい形への転換が完成し、やがて助詞や助動詞を下接する方向に向

かったことが確認され、天草版平家は、後者の附屬語を下接する用法では、まだ古い用法を残していると言える。

(一) はじめに

小稿は一九八九年三月、サンパウロ大学日本文化研究所報に「天草版平家物語の動詞について」としてポルトガル語で発表した論文を、日本語にあらためたものを骨子としている。原論文は、

Sobre os verbos da obra "Contos de Heike, edição Amakusa"

という題で、雑誌名および発行所は、

ESTUDOS JAPONESSES IX

CENTRO DE ESTUDOS JAPONESSES DA UNIVERS-

IDADE DE SÃO PAULO

とするものである。これは筆者がサンパウロ大学に客員教授として赴任中に発表した論文であるが、ポルトガル語での発表であるため、日本ではほとんど理解されないと思わ

れるので、ここにあらためて日本語で発表しようとするものである。また現地の方々の理解のために「天草版平家物語」についての解説や翻訳者「不干ハビアン」については、先学の研究によりながら(二)や(三)に解説を加えている。小稿にはその部分の省略も考えたが、今はそのままの形で残すことにする。ただ二段活用の一段化については右の論文では触れなかったが小稿ではわずかであるが触れることにする。

(二) 天草版平家物語について

天草版平家物語は一五九三年熊本県天草で出版されたキリシタン版の口語訳平家物語である。一般に平家物語と呼ばれる作品は、鎌倉時代の初期一三世紀の成立で、語り物として流布したため、多くの異文をもつ諸本が伝えられているが、この天草版平家物語はそれらの諸本とは全く別の成立事情をもつ作品である。これは一六世紀後半からキリシタン布教のために来日していたイエズス会の外国人宣教師たちが、布教のための日本語修得を目的として編集した本の一つである。

原本はロンドンの大英図書館にただ一冊だけ伝わるといふ本で「日本のことばとイストリアを習ひ知らんと欲する人のために世話にやはらげたる平家の物語」という長い書名がついている。すなわちこの本は書名にいうように、日本語と日本の歴史を学習するために口語で書かれた平家物語である。

この序文には「わが師がこの国に天の御法を説くためには、この国の風俗を知り、言葉に上達しなければならぬ。そのために日本の書をわが国の文字にして出版しなければならぬから、その良い書を選んで編集せよ。という師の言葉をうけてそのご命令に従ってこの本を作るのである。日本の昔を述べた本が多いなかで平家物語が最高だと考える。そして二人が相対して雑談をするような形にして口語で抜書的に記したものである」という趣旨のことを記し「特に御出世、一五九二、一二月一〇 不干ハビアン謹んで書す」と結んでいる。

この序文に示しているように、天草版平家物語の編集には「不干ハビアン」があたっている。このハビアンは日本人のイルマンで、天草コレジョで日本語の教師をつとめていたらしい。ハビアンの伝記については、つまびらかにしない点が多いが、新村出博士や土井忠生博士という方々により、ある程度明らかにされている。

大英図書館蔵の日本耶穌会関係古文書集 (Papers relating to the Jesuit Mission Japan) の中の一冊に、「一五九二年一月に本会が日本副管区において有する教舎および駐在所の目録、並びに其処に居住せるパアテレ及びイルマンの名簿」という文書があるということをも土井博士が「吉利支丹文献考」に示しておられる。それによって天草コレジョの名簿の一部を示すと次のようである。

天草コレジョとノビシアド

59 P. Francisco caldeiron スペイン人、学林長 顧問、

日本語を普通に解し、日本語の懺悔を聴く。

- 60 P. Diogo de misquita ポルトガル人、日本語を甚だよく解し、日本語にて説教す。

(中略)

- 94 Jr. Vngnio fabiam 日本人、ラテン語を少しく解す。
95 Jr. Tacai Cosme 日本人、日本語以外解せず。

この二名は日本語の教師にて、日本語を教授せり。

この資料の Vngnio fabiam が天草版平家を編集した「不千ハビアン」であると思われる。彼は禅僧の出身であるが、当時天草学林で日本語の教師をつとめていた。またハビアンは一六〇五年「妙貞問答」という本を著したことでも知られている。さらに翌年松永貞徳の案内でやってきた林道春と儒教とキリスト教について論争し、またその翌年には副管区長が家康や江戸の將軍秀忠を訪れた折にもロドリゲスらとともに同行して活躍したことが知られている。その後まもなく彼はキシタンの教えを捨てて、大和に身をかくし、一六二〇年「破提字子」一卷を著し、過去を清算したといわれる。このハビアンが長老に委嘱されて平家物語を口語に訳し、この天草版平家物語を編集したのは、彼が二七才の時であったという。

(三) 国語学研究資料の視点

一五四九年にイエズス会のザビエル (Francisco Xavier) が鹿児島に上陸し、領主、島津貴久の許可を得て、伝道を開始したことは日本史上有名なことであるが、その後カト

リック、特にイエズス会の宣教師たちが日本での布教のためにも多くの文献を編述し残し伝えている。それらをキシタン資料と呼んでいる。それらの中でイエズス会の巡察使という重職にあったヴァリニャーノ (Alexandro Valignano) が一五九〇年にヨーロッパの活字印刷機を日本に輸入し、それで印刷刊行したものがキシタン版と呼ばれている。

そのキシタン版は、現在一五九一年頃に加津佐学林で刊行された「どちりな・きりしたん」から、その二〇年後に長崎で刊行された「太平記抜書」までの二九種が知られている。^(註3) この二九種の作品を、日本文字か、ローマ字か、日本語か、あるいはポルトガル語か、またはラテン語か、日本語はさらに文語か口語か、という用語字の点から分類して示すと次のようである。

- (A) 日本字・文語のもの 一一種
- (B) ローマ字・ラテン語のもの 五種
- (C) ローマ字・日本語およびポルトガル語のもの 二種
- (D) ローマ字・ラテン語・ポルトガル語・日本語のもの 二種
- (E) ローマ字・文語のもの 六種
- (F) ローマ字・文語および口語のもの 一種
- (G) ローマ字・口語のもの 二種

これらとともに高い資料的価値をもつものであるが、これを国語資料、とくに音韻資料または文法史の資料という視点からみると、(G)のローマ字・口語の作品は特に注目さ

れるものである。この二作品は天草版平家物語と伊曾保物語である。

キリシタン版のローマ字による表記が、当時の音韻資料として貴重であることは言うまでもないが、このローマ字の写音法については、橋本進吉博士の「キリシタン教義の研究」をはじめ、先学の研究があるところである。一方、天草版平家物語の口語資料としての価値は、一般に中世が言文二途の時代で、しかも口語資料が少ないなかで、特に貴重であると言える。この時代は文法史では古代語から近代語へ移ろうとする時代であるため、特に興味もたれる作品である。

ところで動詞の古代語から近代語への推移の原理は、(A) 連体形の終止形化 (B) 二段活用的一段化の二つにあると考えることができる。例えば「受く」という動詞の活用の変遷は、左表のようになる。Aは平安時代の

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
A	うけ	うけ	うく	うくる	うくれ	うけよ
B	うけ	うけ	うくる	うくる	うくれ	うけよ
C	うけ	うけ	うける	うける	うけれ	うけろ

の活用であり、Cは現代語の活用である。AがCになる過程にBがある。BはAの連体形「うくる」が、Bの終止形となり、Aの終止形「うく」にとって代わっている。このAからBへの変化がいわゆる「連体形の終止形化」という現象である。一方、BからCへの変化はBの「うくる・うくれ」が「うける

・うけれ」と変化して、母音Uがeに変化している。これは「うけ・うく」(Uk・e-Uk-u)の二段活用が「うけ」(Uk・e)だけ的一段活用になっている。この変化が「二段活用的一段化」である。動詞の活用の変化は巨視的にみれば上記の連体形の終止形化や二段活用的一段化によって、近代語に移ってゆくわけであるが、微視的には当時の作品を細かに調査し、連体形の終止形化、二段活用的一段化はどのように行われたかを調査する必要があり、その資料としては、この天草版平家物語は最上の作品であるといえる。

(四) 連体形と終止形の用法

日本語における用言や助動詞の語形変化はどのような語に続くか、どんな切れ方をするかによって語形を変える。これを活用と呼んでいる。橋本進吉博士は「語の意味の切れ続きを示し、又種々の語に続くために、同じ語の形の変化するのを活用といふ」と説明されている。そして活用する語が活用してとる種々の違った形、すなわち未然形・連用形……命令形の六つを活用形という。また同じ活用形においても、例えば、「をかしき歌」での「をかしき」は連体形で、文字どおり「歌」に連なり体言を修飾している。また「歌ぞをかしき」という場合の「をかしき」も体言には続かない形であるが連体形である。すなわち連体形というものには、単一な用法ではなく、幾種類かの用法が含まれているのである。このことは他の活用形でも同じで、各活用形はいくつかの用法をもっている。これを活用形の用法と呼んでいる。小稿のテーマの

天草版平家物語の連体形の終止形について述べる前に、平安時代の語法により表現されている作品の活用語の終止形と連体形の用法についてとりまゝとめておこう。

A 終止形の用法

(A¹) 終止法——述語として文を終止する用法

○都へたよりもとめて文やる。(徒然草)

○雨など降るもをかし。(枕草子)

(A²) 助動詞「べし・べらなり・めり・らむ・らし・まじ・なり」などに続く。

○男もすなる日記といふものを(土佐日記)

○同じ深さに流るべらなり。(土佐日記)

(A³) 助詞「とも・な(禁止)・や(疑問)」などに続く。

○散りぬとも香をだに残せ(古今集)

○あやまちすな。心して下りよ。(徒然草)

終止形は(A¹)のような終止法のほかに(A²)・(A³)のように助動詞や助詞に続く用法がある。また連体形の用法は次のようである。

B 連体形の用法

(B¹) 連体法——連体修飾語となる用法

○人げなき所なれば、ここかしこのぞけどとがむる人なし。(堤中納言物語)

(B²) 準体法——体言に準じて用いる用法

○冬はつとめて。冬の降りたるはいふべきにあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、(枕草子)

(B³) 係助詞「ぞ・なむ・や・か」を受けて終止する用法

○女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。(土佐日記)

(B¹) 疑問・不定などを表す副詞や名詞などを受けて終止する用法

○など、また真人たちのかうする。(落窪物語)

(B²) 余情を含んで終止する用法

○雀の子をいぬきが逃がしつる。(源氏物語)

○我ながら心の果てを知らぬかな捨てられぬ世のまたいとはしき(新古今集)

この余情終止の用法は平安時代ごろまでは会話文か和歌に用いられるのが普通である。

(四) 天草版平家の連体形の終止形化

連体形の終止形化とは連体形の用法のうちの(B¹)の用法が時代が下るにつれて次第に余情や感情を特に含まなくとも、この形を用いるようになり、やがてAの用法にとつて代わる現象である。この現象が天草版平家物語ではどう用いられているかが、小稿のテーマである。

天草版平家を口語資料としてその用法を検討するのに、まず理解しておかねばならないことは、この中には文語的表現が混ざっている部分があることである。というのは、この作品には三頁分の序文と、数首の和歌及び引用句など文語で書かれた部分があるということである。古代語(文語)から近代語の口語への推移を検討しようとするためには、この部分は他と区別して取り扱う必要がある。

さて連体形が終止形化すると、ラ行変格活用は変格活用で

なく四段活用となるが、天草版平家ではどう用いられているか、「あり」の活用と使用度数を示すと、次のようである。

未然形 あら 159	連用形 あり 54	終止形 あり 7	連体形 ある 175	已然形 あれ 83	命令形 あれ 54
あつ 443	ある 43				

「あり」は一〇一八回用いられていて、それを活用形別に示すと右の表のとおりである。終止形に「あり」が七回、「ある」が四三回であるから大勢は四段活用となっていることは明らかである。しかし古い形の「あり」が七回用いられているので、その用例を検討する必要がある。七例のうち一例は序文中の例であり、四例は和歌の中の例である。序文と和歌は文語であることは前述のとおりであるから、この五例を除くとあと二例だけは口語文と思われる中に終止形「あり」が用いられていることになる。そこでその「あり」はどう使われているかをみると、下記のようにである。

- (1) たとひさありとも重盛かうでまかりいれば、おん命にも
かはり奉らうずると (31-12)

(2) さうありとも何ごとのお使いとか聞いた? (330-18)

二例とも「ありとも」と接続助詞「とも」を下接する用法である。すなわち(A₁)の用法である。言い換えるとラ変としてはその終止形「あり」は(A₁)の用法が二例だけあり、(A₁)の終止法には一例も用いられていない。そしてその(A₁)の用法には新しい形の「ある」の方が用いられている。「ある」の終止形四三例中四二例は次の例のような終止法である。

(3) 異国にさる例がある。(51-3)

このように「あり」の形の終止法はすべて姿を消し「ある」の形に代わっている。また「ある」の終止形に接続助詞「とも」がついた「あるとも」の形が一例だけある。

(4) 染しみ栄え世に|あるとも、千年の齢を延べうか? (314-21)

「ある」の形の終止形は終止法だけでなく、下に助詞を接続する(A₁)の用法にも一例用いられていることになる。すると、「とも」に続く形は「ありとも」が二例、「あるとも」が一例用いられていることになる。

以上ラ変に限ってみても、平安時代には連体形であった「ある」の形が、この天草版平家では終止形として用いられている。そしてこの連体形の終止形化は、上記の用法でみると、終止法である(A₁)の用法から完成していったものであるかと考えられる。この現象をさらにカ変とサ変について考察してみよう。説明の都合上、平安時代と同じ終止形の形を「終止形α」とし、連体形が終止形化した形の終止形を「終止形β」として、以下考察していくことにする。

天草版平家のカ変・サ変の活用と、その度数を示すと次のとおりである。但し複合語のカ変・サ変については、後述することにして今ここでは触れない。この表に示すとおり、カ変では終止形αの「く」は例がなく、終止形βの「くる」が四例用いられている。その終止形βの「くる」もすべて次の例のように終止法(A₁)である。

未然形	連用形	終止形 α	連体形	已然形	命令形
せ 149	し 273	α す 4 β くる 4 β する 2	くる 12 する 58	くれ 1 すれ 16	せい 11 せよ 2 こい 2

(5) 東国の武士とおぼしうて三十騎ばかりくる。(239-5)
 (6) 武者一騎沖なふねに目をかけて五段ばかり泳がせて来る。(276-7)

一方、サ変では終止形 α の「す」が四回、終止形 β の「す」が二回用いられている。終止形 α の四回のうち二回は序文中で使用である。それを除外してあとの二例は次の例である。

(7) まことに人は世にあるとてもすまじいことをし、言ふまじい事を言はば、(115-15)
 (8) これは院方の者ぞ、過ちをすなと、言うたれども、(222-20)

この終止形 α の「す」は(7)の文では助動詞「まじい」に、(8)の文では禁止の助詞「な」に続いて用いられている。上記終止形用法の(A₂)と(A₃)である。ところが、終止法(A₁)には、終止形 β の「する」の形が用いられている。その二例を示す。

(9) 木曾は京に居ていろいろのことをする。(228-1)
 (10) やがてその日西国への門出をすると聞こえたほどに、(229-15)

以上ラ変・カ変・サ変の終止形の用法を検討してみると、ラ変「あり」が「ありとも」と助詞「とも」を伴ってだけ用いられ、サ変の終止形 α の「す」が「すまじい・すな」と付属語を下接してだけで用いられている。そしてこの終止形 α の方は終止法として用いられたものはない。一方終止形 β の「ある・くる・する」の形は、終止法はすべてこの形が用いられている。そこらをまとめてみると、

I 終止形 α は下に助詞・助動詞がつく場合にだけ用いられ、終止法には用いられていない。

II 終止形 β は、終止法はすべてこの形が用いられ、その他付属語がついたものもある。

というような用法の差異がみえる。ただこの傾向は他の下二段活用や上二段活用あるいは複合語のカ変・サ変にもあるのだろうか、さらに検討してみることにする。

天草版平家に下二段活用は異なり語数語八二語、延べ語数三一九四語が用いられている。その三一九四語を各活用形別に示すと、次のようである。

未然形	連用形	終止形 α	終止形 β	連体形	已然形	命令形	合計
868	1923	12	31	186	110	64	3194

終止形 α の一二回と終止形 β の三一回が解明の鍵であるから、まず終止形 α の一二回から検討することにする。一二回のうち和歌での使用が四回、古い語句の引用での使用が三回、序文中での使用が一回ほどある。この八例を除い

てあと四例が当時の口語文のなかに、古い形の下二段終止形がいわれていることになる。その四例は次のとおりである。

(11) つひに隠れあるまじいことなれば、しばらくは知らずまじいと思ふ。(315-18)

(12) 敵に首を取らずまいと思ふたか。(269-14)

(13) うとうもあれ、親しうもあれ、えこそ申しなだむまじけれ。(39-3)

(14) 女房たちいづれも遅れ参らずまじいともだえられた。(343-24)

この四例はすべて、「まじい」か「まい」が下接したものである。すなわち助動詞「まい・まじい」が下接する形だけが古い形の終止形 α が用いられている。しかも「まい」は現代語では「知らせまい・受けまい」というように、下二段活用などでは終止形ではなく、未然形につくようになっている。この「まい・まじい」の未然形接続への変化は、天草版平家にも見られる。

(15) 北の方この人に離れまじいものと泣かるるに、(285-13)

このように、「まじい」は上二段や下二段活用では未然形に接続するようになっており、下二段の「終止形 α + まじ」の形は、当時ゆれている語法の一つであったと考えられる。

一方、終止形 β の三一例はどうであるかをみると、もっとも多い例は終止法である。

(16) 心の底に意趣を残さうずる儀でござなければ、申し上ぐる。(45-18)

(17) 熊谷これを見て、平山を討たすまいとて、続いて駆くる。(264-24)

このように平安時代ならば連体形であった形がこの頃には終止形として用いられている。右の(16)・(17)のような終止法が三一例中、二六例用いられている。残りの五例は助動詞「らん」と助詞「とも・な」に続く例である。

(18) ほととぎす雲居に名をやあぐるらんと仰せかけられたれば、(143-1)

(19) そののちはしかるべい人たちをば乗するとも、雑人どもをば乗するなど言うて、(272-21)

この付属語に続く例は「らん」にこの一例、接続助詞「とも」に続く例二例、禁止の助詞「な」に続く例二例の計五例である。

以上下二段活用の調査をまとめると、次のように言うことができる。(但し、序文や和歌の用例は含めない)

Ⅲ 終止形 α は下に助動詞「まじい」などを下接してだけ用いられていて、終止法の例はない。

Ⅳ 終止形 β は多く終止法に用いられているが、そのほか助動詞「らん」、助詞「とも」や「な」が下接しての用法もある。

連体形の終止形化とは、終止形 β の用法が終止形 α にとつて代わる現象である。Ⅳに示すように、終止形 β が終止法のほかに助動詞や助詞が下接した例がみえる点に、終止形

βの用法の拡大がうかがえる。

次にその他で連体形の終止形化がわかる上二段活用と、複合語を含めたカ変やサ変はどうであるかについて調べてみよう。各活用形別の語数は次のとおりである。

	未然	連用	終止α	終止β	連体	已然	命令	合計
カ変	10	185			20	6	2	307
上二	91		2	1				
サ変	504	670	24	52	141	36	32	1459
			0	7	18	3	2	68

上二段活用は延べ三〇七語用いられているが、それを活用形別にとすると右のとおりで、終止形αが二回、βが一回用いられている。その例を示す。

(20) 僻事してわれを恨むなと言はれたれば、(33-2)

(21) 懈怠にして頼朝恨むなと、(302-19)

上二段の終止形αは右の二例で、ともに「恨むな」という形で禁止の「な」に続いて用いられている。ちなみに「恨む」は本作品でも「ーみ・ーみ・ーむ・ーむ」と用いられていて上二段活用である。一方、上二段の終止形βは、(22) 朝敵となつては、いかに悔ゆるとも、益あるまじい。

(43-1-1)

このように「悔ゆるとも」と接続助詞「とも」に続いて用いた一例だけである。

カ行変格活用は「来る」のほか複合語を加えて異なり語数一五語、延べ語数で六八語が用いられている。六八回のみで「来る」が四九回用いられていて、他は「出で来

る」などの複合語である。その中で終止形αは一回も用いられていない。終止形βの方が七回用いられている。その七回は終止法が六回で、接続助詞「とも」に続くものが一回である。終止法六回のうち「来る」が四回、「攻め来る」「馳せ来る」が各一回用いられている。終止法の例は次のとおりである。

(23) さうするほどに成田の五郎も来る。(267-7)

(24) 文袋を首にかけた僧の蓑毛の馬に乗って馳せくる。

(391-16)

接続助詞「とも」に続くものは次の一例である。

(25) たとひいかなる僻事いできるとも、君をば何とさせられうかと、(49-6)

ところで、サ変は和語や漢語との複合語があつて、異なり語数二〇四語、延べ語数一四五九語が用いられている。それらのなかで終止形αは、異なり語数一三語、延べ語数で二四回用いられている。なおその中で「書す(3)・千辞万退す(1)・達す(1)・免す(1)「および「す」のうち二回は、序文や引用文での使用である。したがってその文語表現での用例を除くと、口語文中での終止形αは九語一六回用いられていることになる。その語を下接語によって分類して示すと次のようである。

(a) 助詞「な」に続くもの

あひびぎす(1)・あやまちす(5)・す(1)・ふかくす(1)

計八回

(b) 助動詞「まい・まじい」に続くもの

けっす (1) ・す (1) ・そんす (1) ・ぞんず

(1) ・まらす (2)

計六回

(c) 助動詞「らう」に続くもの

おはす (2)

二回

サ変の終止形 α の用法は、右の(a) (c)のように助詞・助動詞に下接する(A₂)・(A₃)の用法だけで、終止法(A)の例はない。

一方、終止形 β の五二例はどうかをみると、この用法をもつ語と回数は次のとおりである。

うちじにする (1) ・けんぶつする (1) ・する (2)

・すいびする (1) ・ぞんずる (23) ・まらす (24)

この五二例のうち、五〇例は終止法として用いられている。その終止法の例を示す。

(26) 能登殿に寄りつく者がながい、本意なうござれば、組み奉らうと存ずる。(346-23)

(27) その日西国への門出をすと聞こえたほどに、(229-15)

サ変の終止形 β は、このような終止法が五〇回用いられている。そして残りの二例は、助詞「とも」と助動詞「まい」に続くものである。その二例を示す。

(28) 母御前には別れまらすとも、父御前には必ず同じ所にとこそ大人しやかに仰せられた。(385-11)

(29) 三町にはすぎまらすまい。(246-14)

このようにサ変の終止形 β の用法でも五二例中五〇例が終

止法であるように、多くが終止法で、そのほか助詞や助動詞に続いて用いられている。

次に二段活用的一段化についてであるが、天草版平家においては、一段化した語は「経」の一語だけである。「経」の活用形別語数を示すと次のようである。

未然形「へ」一回、連用形「へ」二回、已然形「ふれ」二回・已然形「へれ」二回

已然形の「ふれ」は下二段であるが「へれ」は下一段である。すなわち一段化した例が二回だけ混じているとみるべきであろう。已然形の「ふれ」と「へれ」の例を示す。

(30) 平家は日数をふれば、(Fureba) 都をば山、川、海にへだてられて、(196-6)

(31) 日数をふれば、(Fureba) 能登の国に着かせられた。(371-14)

右の例は下二段に活用したものである。

(32) 日数へれば、(Fereba) 駿河国浮島にかからせらるるに、(360-23)

(33) 日数へれば、(Fereba) 六月二十日には近江国篠原に着かせられ、(383-17)

(32)・(33)は「経れば」が一段に活用している。天草版平家で一段化した例は右の二例だけである。

ロドリゲスによると、このような動詞の一段化は話しこゝとばで稀に使われていた。特に関東で用いられ、都では一部の者に使用されていたという。したがって、この二段活用が一段化するのが普遍化するのとは次の時代である。

(六) まとめ

中世は言葉の変動期であった。文法史上でも大きな変化があった。その事情を「国語史要説」^(註5)では次のように述べている。

動詞はこの期に大きく変動している。その一つは、連体形が終止形の機能をもつようになったことである。前代でも会話の文中では、上に係助詞がないのに、文末を連体形で結ぶことがあったが、院政期になると、会話文だけでなく、地の文にもあらわれるようになった。(中略)室町期には、すべての活用を通じて、終止形と連体形が同形になり、この点では今日と同じになった。(108頁)

巨視的にみれば確かにこのとおりである。室町時代には連体形の終止形化は完成し、終止形と連体形は同形になっているはずである。ここで考察の対象とした天草版平家物語は、その中世の最末期一五九二年に、口語で書かれた作品である。この作品の終止形を細かに調査することは、連体形の終止形化の現象を徹視的に、その過程をも含めて考察することになると考えられる。その観点から平安時代からの古い形の終止形を「終止形 α 」とし、かつての連体形がとって代わって終止形となっているものを「終止形 β 」と仮に名づけて、その用法を各活用の種類別に考察してきた。いま、終止形 α の用例数をとりまとめて示すと表1のとおりである。古い形の終止形である終止形 α は全部で四五回

表1 終止形 α の活用の種類別使用度数

	A ₁ の用法	A ₂ の用法			A ₃ の用法		小計	文語文中の例			合計
	終止法	まじい	まい	らう	とも	な		序文	和歌	引用	
ラ 変					2		2	1	4		7
下二段		2	2				4	1	4	3	12
上二段						2	2				2
カ 変											0
サ 変		4	2	2		8	16	7		1	24
ナ 変											0
全体	0	6	4	2	2	10	24	9	8	4	45

用いられている。(但し、四段活用や一段活用はもともと連体形と終止形が同形であるので考察の対象から除く)その四五例のうち序文・和歌・引用句など、もともとと文語文のなかでの使用が二一例あるから、これを除くと口語文のなかでの終止形 α は二四例あることになる。となると古い形が完全にとって代わられて消滅しているのではなく、いくらかは残っていることになる。そしてその残った二四例を検討すると、終止法の用例は皆無で、助動詞「まじい・まい・らう」に続く例が二一例、助詞「とも・な」に続く例が二一例であることは表1の示すとおりである。

連体形の終止形化による用法の推移は、表2と対照すると明確になる。表2の終止形 β の用法をみると、まず二四回使用の終止法が注目される。表1と表2の終止法の項目を比較すると、表1の終止法は○であるのに対し、表2は一二四である。すなわち終止法に関しては、「あり・上ぐ・く・す」というような古い形は一例もなく、すべて「ある・上ぐる・くる・する」というような、以前の連体形が終止形になったものだけである。この終止法に関しては連体形の終止形化は完全に完了しているといえる。

一方、(A₂)の助動詞を下接する用法では、表1の方が一二例、表2の方が二例で、数の上では表1の方の、終止形 α につく例の方が多い。ただ「まじい・まじい」は常に終止形接続ではなく、一段活用や二段活用では未然形につくようにもなるから、その点は考慮に入れなければならない。さらに(A₃)の助詞を下接する用法では、終止形 α では

表2 終止形 β の活用の種類別使用度数

	A ₁ の用法		A ₂ の用法		A ₃ の用法		合計
	終止法		まい	らん	とも	な	
ラ 変	42	/	/		1		43
下二段	26			1	2	2	31
上二段					1		1
カ 変	6						6
サ 変	50		1		1		52
ナ 変							0
全 体	124		1	1	5	2	133

「とも」に二例、「な」に一〇例があり、終止形 β では「とも」に五例、「な」に続くもの二例がある。このように対照してみると、次のような見方ができる。助詞「とも」を下接する用法では「ありとも」という形が二回用いられているのに対し、「終止形 β +とも」の方は五回用いられているから、この仮定法はほぼ新しい形へ移っているようである。また「な」を下接する用法は終止形 α が一〇例、終止形 β が二例であるだけに、また古い形の方が優勢であった

とみななければならない。

以上、表1・表2のデータから読みとれることは、次のようにまとめることができる。天草版平家の連体形の終止形化の現象は、終止法においては完全に完了し、一つの例外もない。ただ助動詞や助詞を下接する用法では、古い形の終止形についた例がある程度残っていて、この用法では新旧両方の形がみられる。このような点から、連体形の終止形化は、まず終止法から新しい形への転換が完成し、やがて助詞・助動詞を下接する用法へ向かっていったということが確認できる。

また二段活用の一段化は本作品では、ごく一部にその現象をみることができただけである。

注1 新村出「南蛮広記」岩波書店

注2 土井忠生「吉利支丹文献考」三省堂

注3 「国語学大辞典」(東京堂出版)による。

注4 「国語学概論」岩波書店

注5 土井忠生・森田武「国語史要説」修文館出版

